

## AI・自律・法

——タルコット・パーソンズのマクロ社会変動理論を踏まえた見通し——

久保 秀 雄

## AI, Autonomy, and Law

—An Outlook Based on Talcott Parsons' Macro Social Change Theory—

KUBO Hideo

### 【目次】

- I はじめに：AIは個人の自律を損なうのか
- II 前提：パーソンズの理論の要点
- III 注目すべき関係：「専門職への依存」と「自律の高度化」
- IV おわりに：法に与える影響

### I はじめに：AIは個人の自律を損なうのか

この報告では、「AI」という独立変数が「法」という従属変数に与える影響を、その媒介変数の一つになると考えられる「個人の自律」に着目して検討します。その際、社会学の第一人者であるタルコット・パーソンズが構築したマクロな社会変動に関する理論を参照します。

AI（人工知能）が社会に及ぼす影響は、様々な分野で関心を集めていますが、日本の法学界でも近年流行のトピックとなっています。その中で有力な説として、「今後AIが法にとって代わるようになる」との予測があります。その予測によれば、AIによる機械的な判断が個人の判断に代替するようになり、個人の自律という法の前提が成り立たなくなってしまうと考えられています。つまり、個人が自律的に自分で判断して契約を締結するのではなく、AIのアルゴリズムに従った自動取引などが当たり前のように行われるようになって、法ではなくアルゴリズムが支配する社会が到来すると考えられています（小塚 2019: 150–151, 208）。こうした考えは、AIへの依存によって個人の自律が損なわれるようになるのではないかと不安を感じるAI脅威論と整合的であり、社会的には多数説になるのかもしれない。

他方で、注目すべきことに、AIがむしろ個人の自律を支援するようになる可能性に期待する見解もあります。というのも、AIは医師や弁護士のような専門職の延長線上の存在であり、AIはいわば代理人として本人の能力の限界を補う手助け役になると考えることができるからです。しかも、専門職同士の相互牽制のように、AI同士の相互監視・相互制御によって、素人である本人の保護も実現できると考えられています（成原 2020: 37-41）。

このようにAIがどのような影響を及ぼすのか、その予測が分かれる中で、本報告は、マクロな社会変動に関するパーソンズの理論を踏まえると、AI脅威論とは違って後者の見込みも十分にある、つまりAIが個人の自律を促進する可能性もあると考えられることを示していきます。

## II 前提：パーソンズの理論の要点

では、マクロな社会変動に関するパーソンズの理論とはどのようなものなのでしょうか。必要最小限の内容にとどまりますが、その要点を紹介しておきましょう。

パーソンズはマクロな社会変動を、できるだけ科学的に把握するために、これまで科学の世界で優れた成果をもたらすことに大いに寄与してきたシステム・モデルを導入します。システム、平易に言い換えると、様々な要素の「複合」に関して、その複合の度合がより複雑化して進化するか、逆に単純化して退化するかといった観点から、社会の変動を捉えることになります（パーソンズ 1966=1971: 2-5, パーソンズ 1978=2002: 87-100）。

たとえば、人類の原点であるローカルな部族社会は、同質性が高く分業が進展していないため、複合度が低い状態にあります。他方で、現代の先端をいくグローバルな産業社会は、多様性が高くサプライチェーン（供給連鎖）の最適化が地球規模で図られていくほど分業が非常に進展していて、複合度が高い状態にあります。そして、このような地球規模で供給連鎖の最適化を図り生産能力を向上させられるような、多様な人々が悲惨な流血をともなう「万人の万人に対する闘争」に陥らず共存共生して協力し合う奇跡のような社会がどうして成り立つようになるのかを解き明かそうとすることが、パーソンズの理論の眼目になります（ロバートソン/ターナー 1991=1995: 24, Bortolini 2016: 252, 265, 久保 2022: 11）。

## III 注目すべき関係：「専門職への依存」と「自律の高度化」

その成果として、パーソンズは次のような関係が成立することを明らかにしています。すなわち、社会における分業の進展には、分業という専門分化による科学技術の発展、その発展に基づく様々な専門職の増大、そして個人の自律の高度化、さらには法の社会的重要性の上昇などが、多様な変異が

生じうるとはいえ、通常であれば連動して随伴すると、パーソンズは示しています（パーソンズ 1969=1973: 269–270, 久保 2020: 160–167）。

注目に値するのは、「科学技術や専門職への依存の増大」と「個人の自律の高度化」はこれまで両立してきたし、今後も両立し続けるだろうと予測される、という点です。たとえば、科学技術の発展の恩恵を受けて高度に発達してきた医療の専門職に病気の治療を委ねることで、本人は健康を回復する確率が高まります。つまり、病気のままだと得られなかった様々な活動の自由を得られるようになります。このように、医師や理学療法士などの指示に従う、言い換えれば、治療やりハビリの具体的な内容について素人が自己判断する自由を放棄して専門職の判断を信じ託す（といった点に関しては自己判断する）からこそ、その信託と引き換えに、的確な治療が行われて活動の自由が新たに創出される確率が高まります（Best 2015: 4–5）。

このように、“社会” 学の第一人者であるパーソンズの理論は、他者に委ねるからこそ大きなリターンが獲得できるようになるという、まさに“社会” 現象に着目します。様々な他者から足を引っ張られるのではなく協力を取り付けられる社会性の拡張（社交・交流の増大）こそが、個々人の健康状態の改善であれ企業のサプライチェーンの最適化であれ、生産能力の向上につながるし、それがひいては社会の発展をもたらすと考えられています。

パーソンズは「合理的な基準に従っている人間の方が……ランダムな衝動に絶えず揺さぶられているために明確な進路を保持できない人間よりも、実際にははるかに自由である」と述べています。医療専門職を介して医療上の合理的な基準に従い、治療や健康増進に取り組むことは自らを律する自律に該当しますが、行き当たりばったりでなすがままに任せるのではなく、自律することで、人はより自由に活動できるようになると理解できるのです（Parsons 2007: 448–449）。

そもそも人は生まれながらにして高度に自律し自由を享受できているわけではなく、家庭の外で、これまた専門職の一種である教職の資格を有する様々な人々から公的な教育を受け学習し成長していくことを通して、自律の高度化を図っていくのが通常のパターンになります。したがって、専門職である他者への依存と個人の自律が必ずしも二律背反の関係になるとは限らない、ゼロ・サムの関係になると決めつけてはならないことに気をつける必要があります（Parsons & Platt 1973: 3–7, 232–240, 246–247, Best 2015: 24–26）。

#### IV おわりに：法に与える影響

AI がどんどん進化していくと個人の自律が脅かされるのではないか、といった不安や恐怖が生じるのは不思議なことではないと思います。もっとも、視野を広げて、マクロな社会変動に関するパーソンズの理論を参照すると、個人が合理的に認識し活動できるように手助けをする科学技術として、AI は

個人の自律をむしろ促進する可能性もあるのではないかと考える余地が出てきます。

したがって、AIが法に与えるマクロな影響は、次のように把握できると思われます。AIを脅威と捉える見方からすると、「AIの進化によって個人の自律が損なわれていくことで、個人の自律を前提とする法は、その前提がどんどん非現実なものとなっていくので、今後益々社会で通用しなくなっていく。そして、法はAIにとって代わられる」のが未来のシナリオとなるでしょう。他方で、AIに期待する見方からすると、「AIの進化によって個人の自律が促進されるため、個人の自律を前提とする法は、その前提がどんどん現実的になっていくので、今後益々社会で通用するようになっていく。つまり、法はAIと両立する」のが未来のシナリオとなるでしょう。

後者のシナリオに関しては、たとえば、AIによる支援を容易に受けられるようになると、不当に権利を侵害されるというショッキングな被害の経験ゆえに、合理的に認識し行動することができずに「泣き寝入り」を余儀なくされていた被害者が、自律性のある程度は回復できて法を用いて被害の救済を訴える行動を選択しやすくなるような例があげられるかもしれません（エンゲル 2012=2016: 70–83, 久保 2016）。ちなみに、そうした被害者等を支援する専門職に関して、AIは弁護士にとって代わるよりも、むしろその作業能力を拡充するように寄与すると示す研究成果があるようです（酒向 2022: 285–294）。

どちらのシナリオが実現するのか現時点では断定できませんし、ある次元では一方のシナリオが実現し、別の次元では他方のシナリオが実現するなど、相反するシナリオが同時に実現する可能性もあるでしょう。ここでは立ち入って詳しく述べることはできませんが、相反する動きが緊張を生じさせながら同時に実現するアクロバティックな可能性を見逃さないのも、社会変動に関するパーソンズの理論の特色となります（小林 1998: 16–19, 久保 2018: 190–191）。

ともあれ、パーソンズの理論が示すこれまでのマクロな社会変動の傾向を踏まえると、その傾向がしばらくは続くだろうと予測できる近未来に関しては、AIが法にとって代わる社会が必然的に到来するとまでは簡単には言いきれないと考えられます。もちろん、人間のコントロールを完全に超越して、動力源の確保も含め人間に依存することなく稼働でき人間を一方的にコントロールできるような、ASI（人工超知能）ないしそれをさらに超えるようなものが実現すると、話は違ってくるのかもしれませんが。この報告では、AIそのものの性能や機能については全く立ち入っておらず、その点が検討課題として残されています。とはいえ、本学情報理工学部教授で本日もご参加頂いている荻野晃大先生と現在取り組んでいる共同研究では、個人の自律の高度化を促進して個々人の Well-being を実現できるようにする AI の開発を目指していますので、その成果が未来を占う手がかりとなるのではないかと考えています。

## 【参考文献】

## [和文]

- エンゲル、デイヴィッド・M（2012=2016）「何が不法行為法の敷居を高くしているのか—権利主張が希少であることとを説明する」（久保秀雄訳）西田英一・山本顯治編著『振舞いとしての法』法律文化社.
- 久保秀雄（2016）「行為の理論の収斂—解釈法社会学とタルコット・パーソンズ」西田英一・山本顯治編著『振舞いとしての法』法律文化社.
- 久保秀雄（2018）「近代における社会変動と法—収斂と変異」高谷知佳・小石川裕介編『日本法史から何がみえるか—法と秩序の歴史を学ぶ』有斐閣.
- 久保秀雄（2020）「死・宗教・法—個人主義に関するタルコット・パーソンズの洞察」『論究ジュリスト』34号.
- 久保秀雄（2022）「ネオ社会進化論からみた Society5.0 におけるアジャイル・ガバナンスの特色：パーソンズの見通しから理解する近未来構想」『京都産業大学世界問題研究所紀要』第37巻.
- 小塚莊一郎（2019）『AI の時代と法』岩波新書.
- 小林月子（1998）「制度的個人主義と社会システム理論」『社会学研究』第65号.
- 酒向真理（2022）「日本型ロー・ファームはAI時代も生き残れるか」角田美穂子&フェリックス・シュテフェック編『リーガルイノベーション入門』弘文堂.
- 成原慧（2020）「個人の自律とAIの自律」宇佐美誠編著『AIで変わる法と社会—近未来を深く考えるために』岩波書店.
- パーソンズ、タルコット（1966=1971）『社会類型—進化と比較』（矢沢修次郎訳）至誠堂.
- パーソンズ、タルコット（1969=1973）『政治と社会構造（上）』（新明正道監訳）誠信書房.
- パーソンズ、タルコット（1978=2002）『人間の条件パラダイム：行為理論と人間の条件第四部』（富永健一他訳）勁草書房.
- ロバートソン、ロランド/ブライアン・S. ターナー（1991=1995）「タルコット・パーソンズにたいする序論—理論、政治およびヒューマニティー—」（中久郎訳）ロバートソン、R./B.S. ターナー編『近代性の理論』（中久郎他訳）恒星社厚生閣.

## [欧文]

- Best, Shaun (2015) *Talcott Parsons: Despair and Modernity*, Routledge.
- Bortolini, Matteo (2016) “Explaining Modernity: Talcott Parsons’s Evolutionary Theory and Individualism,” in A. Javier Treviño, ed., *The Anthem Companion to Talcott Parsons*, Anthem Press.
- Parsons, Talcott (2007) *American Society: A Theory of the Societal Community*, edited by Giuseppe Sciortino, Routledge.
- Parsons, Talcott & Gerald M. Platt (1973) *The American University*, edited by Jackson Toby, Harvard University Press.

\* 本稿は、上海社会科学院・京都産業大学世界問題研究所共催国際ワークショップ「AI と社会」（2024年11月2日開催）での報告内容を、後日加筆修正したものとなる。